

千刈狸の呟き

結婚とは異文化交流である。実家しか知らない状態から、他所の家で生活するようになるのであるから、カルチャーショックは多かれ少なかれあるものと思う。嫁狸が驚いた、義実家の周りで見られる生き物を紹介する。

ある日、義父が子ウサギを拾ってきた。文字通り、山で拾ってきた。とてもかわいらしく、子供たちは喜んだが、差し入れた葉っぱを食べないし、元気がない。人間に捕まるような状態なのだから弱っているに決まっている。インターネットで調べてみると、野生動物は捕まえたり飼ったりしてはいけないようだ。野兎病という感染症もあるらしい。こりゃいかん、と子供たちを説得して、生きていうちに山に返すことにした。ウサギって拾えるんだ、という衝撃の出来事であった。嫁狸の家族ではなく、もちろん本物のタヌキも住んでいる。ご存じだろうか、子供のタヌキは、大人タヌキよりも黒っぽく、ちょっと不良っぽい犬のような見た目をしていて、一見何の動物かわからず思案してしまう。キツネは近くの橋の下に住んでいて、夜7時ころによく道に出てくる。しっぽが立派で、後ろ姿でもわかる。冬、田んぼに積もった雪の中に足跡を付けているのはコイツなのではないかと推察している。

我が家の屋根裏に入り込んだ生き物として、まず、ネコ。天井の隙間からネコが降りてきて、正月用に作った松前漬が舐められた時には、泣く泣くポウル一杯の松前漬を廃棄した。次にハクビシン。ハクビシンは夜行性で、夜中にドタドタと屋根裏を歩き回る。名前の通り、鼻筋が白くて、大きさは猫くらいである。顔は可愛いが屋根裏で溜め糞をするので、絶対に入ってほしくない動物だ（どんな動物にも入ってほしくないが…）。罨でつかまえて追い出しても、穴がある限りまた入り込むらしく、穴をふさぐことが対策となるが、田舎の家の穴をすべてふさぐのは不可能である。縁起物では、屋根の穴でフクロウが子育てして、数年連続で5月初旬に雛が巣立っていった。フクロウの雛は飛べないうちに巣立ち、木の上で親に育ててもらおうそうだ。巣立った数日後に、ふわふわの雛が裏庭にちょこんといた時には、他のケモノに狙われるんじゃないかと気が気ではなかった。ヘビはアオダイショウをよく見かけるが、家の中で遭遇すると、流石に恐ろしい。子供が廊下でヘビを見つけたことがあり、小さいマムシだったという。マムシが室内にいるなど危険すぎるではないか。後日調べたところ、たいていのヘビは、子供のうちはマムシに似た模様なんだとか。廊下に

～ 義実家あるある (3) — 生き物 —

嫁 狸

いたのはアオダイショウの子供だったと思いこむことにした嫁狸である。

危険生物としては、スズメバチの方が恐ろしい。外で時折見かけるだけでも緊張が走るものだが、ある夏、たくさんのスズメバチが毎晩光に誘われて窓にバチバチとぶつかってくるようになった。脱衣所と風呂場めがけて来ているようであり、風呂上がりに裸の状態ですズメバチが脱衣所にいた時の恐怖といたら…。あまりにも多いので、おかしいなと思っていたところ、隣の家の小屋に巣を作っていることが判明した。業者を呼んで駆除するのかと思いきや、隣家の軽装マダムが巣に向かってスズメバチ用の駆除スプレーを噴射していた。あと注意が必要なのが、ムカデである。何度か寝室に入り込まれて、足や手の上を這われて飛び起きたことがある。害虫を食べてくれる益虫の側面もあるらしいのだが、噛まれると痛いし、流石に一緒の布団にはいられない。ムカデは丈夫で殺虫剤に強く、多少の圧では死なないが、熱湯に弱い。駆除する時の参考にしてほしい。ムカデのすみかとなり得る庭の落ち葉の山を除去し、侵入しそうなところにハッカ油（ムカデが嫌う匂い）をスプレーするようにして、対策している。

秋田の野生動物と言えば、カモシカである。我が家の裏山にも住んでいるのか、まれに裏庭にたずんでいる。一方、夫が一度ニホンジカを見かけて写真を撮った。秋田の人は、カモシカは見慣れているが、ニホンジカを見慣れていないので、なんだか変なカモシカだと思ったらしい。ニホンジカは、雪が30cm以上積もる地域には生息しておらず、以前は秋田にはいなかったが、近年見かけるようになったと聞く。車と衝突すると、角でボンネットが裂けるそうなので、意外と油断ならない。そして、小学校の一斉メールで注意喚起が来る動物と言えば、熊、サルである。熊はもう、秋田の代名詞となっているし、あちこちで目撃情報がある。私自身は近くで見たことはないが、いつ遭遇してもおかしくない。熊に遭遇した時には、目をそらさずにじりじりと後退して距離をとる。逆に、サルとは目を合わせてはいけない。サルと目を合わせることは、ケンカを売ることになり危険なのだ。義務教育で習う常識なので、大人もしっかり押さえておこう。

嫁に来てから、ずいぶん動物に詳しくなった。本当はまだまだ、お伝えしたい動物がいるので、この続きはまたいつか。